

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 3 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520465

研究課題名(和文) 地域間・位相間交流から見た条件表現に関する通史的研究

研究課題名(英文) A Historical Study on Conditional Expressions from the Perspective of the Interaction of Regions and Registers

研究代表者

矢島 正浩 (YAJIMA, Masahiro)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00230201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：古代語から近代語へと、順接条件の接続辞がどのように移り変わったのか、変化のしくみとそれを推し進めた日本語史的背景について考察した。その議論の中で、特に近世後期以降の変化を説明するには、中央語から地域語へ(上方・大阪語)、逆に地域語から中央語へ(江戸・東京語)といった位置づけ変化を視野に入れる必要があることも明らかになった。また、言文一致体と一括される文章・文体の多様性について具体的に観察することによって、条件表現の歴史を理解するにあたっては、標準的な近代日本語というものの存在・影響を適切に勘案しなければならない部分があることについて、一定の見通しを得た。

研究成果の概要(英文)：This paper discusses the mechanism of transitions observed in the usage of conditional expressions in the Japanese language from ancient times to the present time, as well as the factors that promoted such transitions. The paper also points out the necessity to take into account the fact that the Kamigata dialect changed its position from a central language to a regional one, while the Edo/Tokyo dialect changed its position from a regional language to a central one in order to explain the changes in the usage of conditional expressions from the second half of the Edo period onward. Furthermore, the study presents the prospect that the changes observed in the grammatical history of colloquial Japanese, especially those made during the Meiji period and afterward, might have been affected by the existence of a standard language.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語史 条件表現史 中央語 地域語

1. 研究開始当初の背景

(1) 着想に至った経緯:

これまで、近世から近代における上方・大阪語と江戸・東京語を対象として、条件表現がどのような変化を起こすのかについて継続的に研究を行ってきた。その結果、仮定的条件文、事実的条件文、原因理由文など、およそ順接でつながれる条件表現を統一的に説明することが文法史研究にとって必要であること、また、上方語が中央語から地域語へ、江戸・東京語が地域語から中央語へとという位置づけ変化を起こすことを視野に入れて捉えないかぎり、説明が見つからない部分があることなどがわかってきた。さらに中央語の性格やその影響力を検討する中で、中央語であることと、規範性・標準語性といった汎地域性を帯びることとの関係を問う必要があるのではないかという着想も得られた。

(2) 本研究に関わる研究動向:

条件表現史については、中世末期あたりまでの記述的研究が進んでおり、近世以降についても少しずつ蓄積されつつある。各時代や資料別の共時的把握は、徐々にではあるが順調に進んでいると言えそうである。ただ、通時的な変化の説明として、古代語から大きな変化が起こる中世末までを連続的に捉えることまでは研究が進んでいるが、そこを超えて現代に連なる歴史把握は必ずしも十分ではない。

また、近世以降について、中央語が上方語から江戸語に交代するという観点から、文法事項の使用説明についてはさまざまな言及がなされてきているが、上方語が地域語になることが言語に及ぼす影響という観点、それによる両言語相互の影響関係の推移という視点からの研究は、条件表現に限らず、全くないといっていい状況である。さらに、近世から近代を貫くいわゆるスタンダード(標準的言語)と通常の話し言葉の相互の影響関係も、検討されていない状況である。

2. 研究の目的

(1) まずは、近世期以降の条件表現史は、中世期以前の歴史を視野に入れて捉えた場合、どのような原理的变化を経たものとして位置づけられるのか、どのような特徴を持つものと捉えるべきなのかを明らかにする。

(2) その上で、条件表現史の記述を軸として、近世後期以降の、いわゆる上方語らしさ、大阪方言らしさというものがどのように、そしてまたなぜそのように形成されていったのか、あるいは江戸語らしさ、東京語らしさというものの由来、その姿の必然性はどのように説明されるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 上方語・大阪語、江戸語・東京語の順接条件表現について、口語的資料を中心に調査する。

(2) これまで得てきたデータを総合的に分析し、各接続辞の消長、用法変化の詳細を見極めることによって、条件表現の歴史を記述する。

(3) その変化を、上方・大阪語単位、さらに江戸・東京語単位で、両者の違いを生む事情等を勘案しながらそれぞれ変化の原理を統一的に説明する。それとともに、両者の相互の影響関係を視野に入れることで整合的に説明される部分を指摘する。同時に、規範的・書き言葉口語体という文体的観点から説明される領域があることを明らかにする。

(4) 条件表現史が、文法史全体の推移と一体となって連動して起こるものであることを整理し、日本語構文史、あるいは日本語文法史を構成するものとして捉えない限り説明が充足しないものであることを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 期間内の成果の多くは、『上方・大阪語における条件表現の史的展開』2013.2 笠間書院刊にまとめている。同書における主な論点・成果は次のとおりである。

問いの要点

) 条件表現の原理は古代語と近世語以降とでどのように相違しているのか

) その変化はなぜ起こったのか、どういう事情が関与するのか

) 次の a~c の3点が条件表現の変化に対してどのように関わっているのか

a. 日本語構文史上に起きた変化(主節に対する従属節の自立性の変化)

b. 上方・大阪語がかつて中央語だったものが地域語にその位置づけを変えること

c. 語彙化・文法化の現象

問いに対して明らかにし得たこと

)): かつての条件表現は、話し手が実際に体験したり、実感を伴うような具体的なできごとに対応したものであった。それを「前件の未確定・確定を活用形で表現し分け、以下に順当な内容を続ける」方法により表していたものである(例文 A 参照)。それに対して、近世期以降は、「非特定時」の前件を取る頻度を飛躍的に高めており、実際のことからの生起とは無関係に思考内で設定したことがらについて、因果関係を見出し、表現していく方法を取る(例文 B 参照)。このことが条件表現の方法を根本的に変容させる原因となった。

A. 事にふれて数知らず苦しきことのみま

されば、いといたう思ひわびたるを(源氏物語、桐壺)...増エテイクノデ

B. とても渡す銀なれば早う戻して親方様の機嫌をとらんせ(近松浄瑠璃、曾根崎心中)...ドウセ渡入金ナノダカラ

それに伴って、後件との関係を明示する形式が発達し、接続辞は「後件に対するところの前件の提示のしかたを表現し分ける」ものとしての役割を明確にする。この変容を背景として、仮定的用法ではタラ・ナラ・ト類、原因理由用法ではニヨッテ・ホドニなどが、それまでのバに代わって中心となる。事実的用法でもタレバが「已然」形を維持する理由を失い、後件との関係をタラで表すことになる。

) a. 構文史上の変化に伴って主節に対する従属節の従属度の強化が認められる。それは、例えば、事実的条件文がかつて大きくは前件と後件とで緩やかな時制の一致が見られたものが、近世期以降、その傾向を喪失する現象や、原因理由文の前件で未来時の出来事を推量の助動詞類を用いずに表す頻度を高めることなどに現れる。

b. 近世後期以降、上方・大阪語は、一見するとその煩瑣な複数表現の使い分け原理を手放し、単純化する方向に舵を切ったかに見える傾向を示す(仮定的条件文・事実的条件文のタラ一極化/原因理由辞の構文レベルでの使い分けの衰退など)。中央語でなくなる、すなわち文化的にも政治・経済的にも交流の中心から外れて人々の移動や生活環境の変化が滞る環境において、特定形式・特定方法による効率的な使用が重視されたと考えられる。

c. 近世期以降、接続辞を構成要素とする接続詞的用法(ソレナラなど)や当為的表現(ネバナラヌなど)が語彙化・文法化を経て発達する。これらの用法には中央語の影響が見出され、この観察により、近世後期(十九世紀初頭)以降の上方・大阪語の変化には、中央語たる江戸・東京語の影響を加味しなければ説明がつかない面があることがわかる。

(2)(1) 以外の成果

仮定的条件文と原因理由文の歴史を、相互に関連性をもって推移するものであると捉えることによって、(1)の結論の一部、すなわち「思考内で因果関係を把握する方向へ」という変化が条件表現の推移を促していたと捉えることの正当性を裏づけることができる。

ここで問題としたのは、中世末期から近世中期において体言述語を受ける非活用型条件句が起こした変化についてである。順接条件史の変化を説明する際には、恒常条件という、前件で「非特定時」の内容を受ける条件句の急増に注目する必要があるが、活用語述語を取る活用型では、それが已然形+バ

を中心とする形式の使用増となって現れる。それに対して、体言述語を取る非活用型では、形式上は未然形+バであるナラバがその現象を担っており、結果として、已然形+バであるナレバは旧来の原因理由用法を維持しやすいという事実を生じているのである。このことを実際の調査で明らかにすることによって、逆に「恒常条件の多用」が、条件表現史の解体に役割を果たした証になるのである。

条件表現の歴史を文法史・構文史研究として捉え直した。

順接条件と隣接する領域の表現について調査・研究対象を広げて捉えることで、条件表現史を俯瞰的に捉えなおし、また次の課題へとつなげる用意としたものである。結果、順接条件史として捉えたことの一つ一つが、いずれも逆接条件史や従属節全体の歴史の説明として成り立つ可能性が高いこと、順接条件史のありようは、文法史・構文史と分かちがたく連関するものであることなどが、具体的に明らかになった。

実際、その立場から、ナラバはいかにして現代のような認識的条件文としての用法を獲得したのかということについて検討を試みた。その結果、古代語のナラバが使用数は少なかったものの表現領域は広く、現代と同様の用法のみならず完了性の仮定(現代語ではタラが担う表現)とも解し得る表現を構成したこと、それが現代のような事実性を仮定する性質を次第に鮮明にしていくこと、その変化の時期が近世後期であることなど、いずれも時制表現史や準体法の歴史を勘案することによって、すべて整合性のある説明が可能であることが判明する。条件表現史をより正確に、説得的に論じるためには、このように、文法史、構文史との一体的、統合的把握が必要なのである。

標準的・規範的な近代日本語の成立に関わって、主に文末形式を指標としながら、「言文一致体」、「台湾における日本語教育」、「断定辞デスの変遷」という観点から検討した。その結果、近代語以降の文法史を説明・記述する際には、この、いわば書き言葉口語体の存在を適切に位置づけていく必要があるという見通しが得られることとなった。

(3) さらに追究すべきこと

本研究の中で、口語史の把握には、書きことば性・規範言語性を帯びた書き言葉口語体の存在・影響を勘案することが必要であることについて指摘したが、まだ可能性を述べるに止まり、実情の解明は進んでいない。近世以前の状況についても講義体等から情報を得て検討をする必要があるし、また近代以降についても演説などの調査を十分に行った上で、日本語史総体に位置づけた条件表現史

研究を詳細に行わなければならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

矢島正浩「条件表現史における近世中期上方語ナレバの位置づけ」『近代語研究』17(武蔵野書院) 2013、pp.3-22、査読無

揚妻祐樹「台湾教育会編『國光』について」『藤女子大学国文学雑誌』87、2012、pp.2-18、査読無

揚妻祐樹「尾崎紅葉『多情多恨』の語りと語法(2) ノデアルの文体」『藤女子大学国文学雑誌』84、2011、pp.1-22、査読無

矢島正浩「近世期以降の当為表現の推移」『日本語文法』10-2、2010、pp.59-75、査読有

矢島正浩「上方・大阪語における接続詞的用法ソレナラ類の推移」『日本語の研究』6-4、2010、pp.16-31、査読有

〔学会発表〕(計5件)

矢島正浩「認識的条件文の成立(パネルセッション「認識的条件文の地理的変異と歴史的变化」)」日本語文法学会(第14回) 早稲田大学、2013.12.1

揚妻祐樹「断定辞デスの変遷」藤女子大学日本語・日本文学会、藤女子大学、2013.6.29

矢島正浩「ナレバの使用から読み解く条件表現史」日本語文法学会(第13回) 名古屋大学、2012.10.28

矢島正浩「ソレダカラ類の発達史 上方・大阪語と江戸・東京語の影響関係を視野に入れて」第277回近代語研究会、愛知大学、2010.10.22

矢島正浩「条件表現史における事実的用法タラ発生の位置づけ」第7回蛭池言語研究所公開研究発表会、大阪大学、2010.6.12

〔図書〕(計2件)

矢島正浩『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院、2013、総頁数 480頁

金澤裕之・矢島正浩編『近世語研究のパーспекティブ 言語文化をどう捉えるか』笠間書院、2011、総頁数 205頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

矢島 正浩 (YAJIMA, Masahiro)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00230201

(2) 研究分担者

揚妻 祐樹 (AGETSUMA, Yuki)

藤女子大学・文学部・教授

研究者番号：40231857